

## 1 目的

本稿では、筆者が北ビルマにおけるフィールドワークにより蒐集した一次資料に基づきながら、ジンポー語(シナ・チベット語族)の動詞連続(特に継起関係のもの)に焦点を当て、このタイプの動詞連続を形作る様々な制約を検討する。動詞連続構文(SVC)は、西アフリカ、東・東南アジア、オセアニア、ニューギニア、アマゾンなどに系統を超えて広く観察される現象であり、北ビルマに分布するジンポー語においても際立った特徴の1つである。なお、Hanson (1896)、劉編(1984)、戴・徐(1992)、戴(2012)などジンポー語の主要文献で、動詞連続の制約を検討したものはない。

## 2 動詞連続：生産性と単節性

動詞連続は、等位性や従属性を表す標識なしに動詞が連続して現れる現象であり、単一の節をなす(Aikhenvald 2006)。ジンポー語の動詞連続の多くは2つの動詞からなるが(1)、3つの動詞や4つの動詞からなるものも確認される(2, 3)。(以下では、動詞連続の先行動詞をV1、次の動詞をV2...と呼ぶ。)動詞連続の高い生産性と意味的透明性は、これが統語規則により形成されることを示唆する。一方、形態論に特有の語彙的制限や音韻的特異性などの特徴は動詞連続には認められない。以上から、動詞連続は形態論(複合語)の問題ではなく、統語論の問題であると考えられる。

(1) day jəkhyòn=gò səgû-gəcà=phé? rìm cá=məyu=?ay məjò...

その 狼=TOP 羊-子=ACC 捕える 食べる=DESID=NMLZ ので

「その狼は羊の子を捕まえて食べたかったので…」(KK1-1564)

(2) cǎn=gò kəwá-çəloŋ=kó? sa duŋ jəthà=?ay.

2du=TOP 竹-藪=LOC 行く 座る 雑談する=DECL

「彼ら2人は竹藪に行って座って雑談した。」(KK1-1319)

(3) thay-múŋdan=dè? pha sa gəlo cá khom=to=?ay=mâ.

タイ-国=ALL 何 行く する 食べる 歩く=CONT=DECL=Q

「タイ国へ行って何をして食べ歩いているのか？」

動詞連続は接続助詞 =nǎ 「～して」を用いて複文として言い換えることができる。

(4) day jəkhyòn=gò səgû-gəcà=phé? rìm=nǎ cá=məyu=?ay məjò...

その 狼=TOP 羊-子=ACC 捕える=SEQ 食べる=DESID=NMLZ ので

「その狼は羊の子を捕まえて食べたかったので…」(作例)

一般に、動詞連続は複数の節(複文)ではなく単一の節(単文)であるとされる(Foley nad Olson 1985: 18–22, Aikhenvald 2006: 6–7)。3節で述べるように、この観察はジンポー語の動詞連続にも当てはまり、動詞連続(単文)とそれをパラフレーズした複文には様々な相違が観察される。

### 3 動詞連続の制約

様々な制約が動詞連続を形作る。形式的には、隣接性制約により、動詞連続の構成動詞間に統語要素を挿入することはできない(3.1)。意味・語用論的には、類像性制約により、構成動詞は経験の順序の類像性に基づき配列され(3.2)、また、単一事象制約により、単一のまとまりをなすと見なされる下位事象のみが動詞連続になる(3.3)。組み合わせられる動詞の規則性に注目すると、意志性調和の原則により、同じ意志性を持つ動詞が動詞連続を形作る(3.4)。項として実現される名詞の規則性に注目すると、二重役割制約により、動詞間で共有される項が決定される(3.5)。

#### 3.1 隣接性制約

動詞連続の構成動詞は常に隣接して現れる。

##### (5) 隣接性制約

動詞連続の構成動詞間に統語要素を挿入することはできない

この制約により、V2の全ての項は動詞連続全体の前に実現される。(6a)においてV2の目的語がV2の直前ではなく、V1の前に現れるのはこのためである。目的語をV2の直前に移動した(6b)は非文である。

- (6) a. ?ənû ci=phé? sa ?əɕun=dàt=jaŋ...  
母 3sg=ACC 行く 揺らす=away=COND  
「母が行って彼を揺らすと…」(KK1-0523)

- b. \*?ənû sa ci=phé? ?əɕun=dàt=jaŋ...  
母 行く 3sg=ACC 揺らす=away=COND

#### 3.2 類像性制約

一般的に、動詞連続の構成動詞は類像性に基づいて配列される(Durie 1977: 330–40, Aikhenvald 2006: 16, 21, 28–9)。ここでいう類像性は、順序の類像性(iconicity of sequence)、すなわち、形式の順序は経験の順序と一致する(Haspelmath 2008: 2–3)というものであり、通言語的に語順現象一般に当てはまるものとされる(Greenberg 1966: 103)。

##### (7) 類像性制約

動詞連続の構成動詞の配列順序は経験の順序の類像性に基づかなければならない

例えば、(8a)は撃つ事象が殺す事象に先行するため、「撃つ-殺す」の語順を取る。V1とV2を置き換えた(8b)は不適格である。

- (8) a. maŋ-ɕá-gəlaŋ=phé? gəp sət=dàt=?ay ɕəloy...  
死体-食べる-鷹=ACC 撃つ 殺す=away=NMLZ 時  
「死体を食べる鷹を撃ち殺したとき…」(KK1-0698)

- b. \*maŋ-ɕá-gəlaŋ=phé? sət gəp=dàt=?ay ɕəloy...  
死体-食べる-鷹=ACC 殺す 撃つ=away=NMLZ 時

### 3.3 単一事象制約

単一のまとまりがあると認識される複数の下位事象が典型的に動詞連続としてまとめられる。一方、はっきりと異なる複数の下位事象は動詞連続を用いて表現することができない (Lord 1975: 28–30, Bruce 1988: 28–30, Aikhenvald 2006: 10–2)。

#### (9) 単一事象制約

動詞連続は単一事象を表さなければならない

Lord (1975: 28–30) はイボ語 (Igbo) の複合動詞について、V2 は何らかの意味において V1 のさらなる発展、結果、着点であることを報告している。この観察はジンポー語の動詞連続にも当てはまる。一方、この性質は複数の節からなる複文には当てはまらない。例えば、「それは毒によってである」という文は、(10a) の複文には後続しうるが、(10b) の動詞連続とは両立しない。なぜならば、(10b) において虎の死は何らかの意味で V1 「殴る」の直接的な結果でなければならないためである。以下の作例は Lord (1975: 28) の例を参考にしている。

- (10) a. *çi cəro=phé? gəyèt=ìná sàt=?ay. guŋ=thè? rē.*  
3sg 虎=ACC 殴る=SEQ 殺す=DECL 毒=COM COP  
「彼は虎を殴ってから、殺した。毒によって。」
- b. *?çi cəro=phé? gəyèt sàt=?ay. guŋ=thè? rē.*  
3sg 虎=ACC 殴る 殺す=DECL 毒=COM COP  
「彼は虎を殴り殺した。毒によって。」

### 3.4 意志性調和の原則

意志性 (volitionality) は複合動詞や動詞連続形成において重要な役割を果たす (影山 1993、加藤 1998)。動詞の組み合わせの規則性に注目すると、原則としてジンポー語動詞連続は同じ意志性を持つ動詞から構成される。すなわち、意志+意志や無意志+無意志の組み合わせは可能であるが、意志+無意志や無意志+意志など異なる意志性を持つ動詞の組み合わせは排除される。

#### (11) 意志性調和の原則

動詞連続の構成動詞は同じ意志性を持たなければならない

ジンポー語の動詞は、意志性に基づくと、意志動詞と無意志動詞に分割される。意志性を確認する基準として命令文や祈願文を形成しうるか否かというテストがある。意志動詞 (e.g., *jà* 「いる」) は命令文を形成しうるのに対し、無意志動詞 (e.g., *bá* 「疲れる」) は命令文を形成しえない。一方、無意志動詞のみが祈願文の述語に立ち、意志動詞は祈願文の述語に立つことができない。以下の例において、動詞の自他などに関わらず、構成動詞の意志性が全て一致していることを確認されたい。

#### (12) 意志+意志

- çi=gò day=thè? ròt khom=màt=wà...*  
3sg=TOP それ=COM 発つ 歩く=COMPL=VEN  
「彼はそれを持って出発して歩いてきて…」 (KK1-1147)

(13) 意志+意志

çi=gò nàmsì-nàmsò tam ɕá=?ay...  
 3sg=TOP 果物-COUP 探す 食べる=DECL  
 「彼は果物を探して食べた…」 (KK1-0896)

(14) 無意志+無意志

phú-rù məkaw=khu=ná lùy khràt=wà=?ay.  
 木-根 傍=PER=ABL 流れる 落ちる=VEN=DECL  
 「(水が)木の根に沿って流れ落ちてきた。」 (KK1-0353)

(15) 無意志+無意志+無意志

gənù=gò gəjòŋ məlàp məcíʔ=to=yàŋ...  
 母=TOP 驚く 忘れる 病む=CONT=COND  
 「母は驚いて気を失って病んでいると…」 (KK1-0523)

一方、\*khrìt phroŋ「恐れる」+「逃げる」(無意志+意志)、\*ɕəmu thèn「動く」+「壊れる」(意志+無意志)、\*gəgàt məcíʔ「走る」+「病む」(意志+無意志)などが不適格であるのは、構成動詞間の意志性が一致しないためであると説明できる。これら不適格な組み合わせは複文を用いることによってのみ表しうる。khrìt=nná phroŋ(恐れる=SEQ 逃げる)「恐れて逃げた」のごとくである。

### 3.5 項の共有と二重役割制約

ジンポー語の動詞連続の項構造は、基本的に構成動詞の項構造の合計に基づく(ここでは周辺項を含む広い意味での項構造を指す。)例えば、(16a)と(16b)の組み合わせである(16c)の動詞連続は4つの項を持つ。ここでは周辺項「車」と「村」はV1により認可され、必須項「物」はV2により認可されている。そして、「彼」は、V1の移動の対象でありV2の動作主であるが、動詞連続において合成され、V1とV2に共有されている。

- (16) a. çi=gò modo=thèʔ mərə=dèʔ sa=?ay.  
 3sg=TOP 車=COM 村=ALL 行く=DECL  
 「彼は車で村へ行った。」
- b. çi=gò ʔəráy ləgú=?ay.  
 3sg=TOP 物 盗む=DECL  
 「彼は物を盗んだ。」
- c. çi=gò modo=thèʔ mərə=dèʔ ʔəráy sa ləgú=?ay.  
 3sg=TOP 車=COM 村=ALL 物 行く 盗む=DECL  
 「彼は車で村へ行って物を盗んだ。」

項の共有に関する1つの重要な制約として、以下に示す二重役割制約 (constraint against role-doubling) がある (Durie 1997: 340-1)。

(17) 二重役割制約

重複する役割 (e.g., 2つの動作主、2つの被動者、2つの道具など) は単一の動詞連続に同時に生起することができない

例えば、作例 (18a) と (18b) を組み合わせた動詞連続 (18c) が容認不可能となるのは、この動詞連続が起点の意味役割を持つ項を 2 つ取るためである。一方、(18d) のように、複文においては 2 つの起点の実現が許される。動詞連続に観察されるこの制約は、Durie (1997: 341) が指摘するように、単一の動詞を主要部に持つ単一の節の性質と同様である。

- (18) a. *çi níta=kóʔ=ná sa=?ay.*  
 3sg 家=LOC=ABL 行く=DECL  
 「彼は家から行った。」
- b. *çi phún=kóʔ=ná ɕəro gáp=?ay.*  
 3sg 木=LOC=ABL 虎 撃つ=DECL  
 「彼は木から虎を撃った。」
- c. \**çi níta=kóʔ=ná phún=kóʔ=ná ɕəro sa gáp=?ay.*  
 3sg 家=LOC=ABL 木=LOC=ABL 虎 行く 撃つ=DECL  
 「彼は家から行って木から虎を撃った。」
- d. *çi níta=kóʔ=ná sa=nná phún=kóʔ=ná ɕəro gáp=?ay.*  
 3sg 家=LOC=ABL 行く=SEQ 木=LOC=ABL 虎 撃つ=DECL  
 「彼は家から行って木から虎を撃った。」

二重役割制約は、同じ格を付与された項を排除するのではなく、同じ意味役割を持つ項を排除する制約である点に注意されたい。例えば、(19) の動詞連続では共格で標示された複数の項が実現されているが、これらは異なる意味役割(すなわち、随伴者、道具、乗り物)を持つため、適格であると判断される。

- (19) *ɲay mənəŋ=thèʔ ràw dùk=thèʔ çi=phéʔ modo=thèʔ sa gəyèt=?ay.*  
 1sg 友=COM 一緒に 棒=COM 3sg=ACC 車=COM 行く 殴る=DECL  
 「私は友人と一緒に車で行って棒で彼を殴った。」(作例)

一般に、動詞連続の構成動詞は少なくとも 1 つの項を共有するとされる (Foley nad Olson 1985: 24)。ジンポー語動詞連続の項の共有に関するもう 1 つの制約に次のものがある。

- (20) 主語共有制約  
 S と A は構成動詞間で共有されなければならない (S=S, A=A, S=A, A=S)

例えば、(21) では V1 の S と V2 の A が合成され、V1 と V2 に共有されている。二重の主語は、複文によるパラフレーズによってのみ実現可能である。

- (21) *la-çà day=gò kərá sa gaŋ=ná...*  
 男-人 その=TOP 髪 行く 引っ張る=SEQ  
 「その男は髪を引っ張って…」(KK1-0201)

#### 4 まとめ

本稿では、ジンポー語の継起の動詞連続に焦点を当てながら、(22) の制約がこのタイプの動詞連続を形作ることを示した。これらの制約はジンポー語に個別のものではなく、動詞連続を持つ他の言語でも報告されている。

## (22) 動詞連続の制約

- a. 隣接性制約：構成動詞間に統語要素を挿入することはできない
- b. 類像性制約：構成動詞の配列順序は経験順序の類像性に基づかなければならない
- c. 単一事象制約：動詞連続は単一事象を表さなければならない
- d. 意志性調和の原則：動詞連続の構成動詞は同じ意志性を持たなければならない
- e. 二重役割制約：重複する役割は単一の動詞連続に同時に生起することができない
- f. 主語共有制約：S と A は構成動詞間で共有されなければならない

## 略号

du 双数, pl 複数, sg 単数, ABL 奪格, ACC 対格, ALL 向格, COM 共格, COMPL 完了, COND 条件, CONT 継続, COP コピュラ, COUP 対語, DESID 願望, LOC 於格, NMLZ 名詞化, PER 通格, Q 質問, SEQ 継起, TOP 主題, VEN 来辞

## (附記)

本稿は科学研究費補助金(課題番号 17H04523)による研究成果の一部である。

## 参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. (2006) Serial verbs constructions in a typological perspective. In Alexandra Y. Aikhenvald and R.M.W. Dixon (eds.) *Serial verb constructions: A cross-linguistic perspective*, 1–68. Oxford: Oxford University Press.
- Bruce, Les (1988) Serialisation: From syntax to lexicon. *Studies in Language* 12.1: 19–49.
- 戴慶厦 (2012) 『景頗語参考語法』北京: 中国社会科学出版社.
- 戴慶厦・徐悉艷 (1992) 『景頗語語法』北京: 中央民族学院出版社.
- Durie, Mark (1997) Grammatical structures in verb serialisation. In Alex Alsina, Joan Bresnan and Peter Sells (eds.) *Complex predicates*, 289–354. Standard: Center for the Study of Language and Information.
- Foley, William A. and Mike Olson (1985) Clausehood and verb serialization. In Johanna Nichols and Anthony Wodbury (eds.) *Grammar inside and outside the clause*, 17–60. Cambridge: Cambridge University Press.
- Greenberg, Joseph H. (1966) Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In Joseph H. Greenberg (ed.) *Universals of language*, 73–113. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Hanson, Ola (1896) *A grammar of the Kachin language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Haspelmath, Martin (2008) Frequency vs. iconicity in explaining grammatical asymmetries. *Cognitive Linguistics* 19.1: 1–33.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
- 加藤昌彦 (1998) 「ポー・カレン語(東部方言)の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113: 31–61.
- 劉璐編 (1984) 『景頗族語言簡志・景頗語』北京: 民族出版社.
- Lord, Carol (1975) Igbo verb compounds and the lexicon. *Studies in African Linguistics* 6.1: 23–48.